

研究業績等に関する事項				
著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 『現代医療の民俗誌』 (第4章「脳死臓器移植医療における諸問題－医療現場からの問題認識－」を執筆) (P. 165-182)	共著	38047	明石書店(全290頁)	医療従事者への面接による質的調査。臓器の提供施設では、そこでの医療従事者の職種や専門(診療科)が異なることによって、脳死・臓器移植医療に対する考えや姿勢が異なる。それはまた各医療従事者とドナー及びそのご家族とのかかわり方が異なることを意味する。特にドナー管理を行なった麻酔科医は、頭(医学的知識)では、脳死を人の死と認めながらも、感覚的にはそれを受け入れるのに戸惑っていた。そこで麻酔医の中には、この医療に対して否定的な姿勢を示す者もいることが明らかとなった。 近藤英俊、浮ヶ谷幸代編 加藤英一、その他7名
(翻訳) 2. 『ストレス百科事典』	共著	2010年1月	丸善(株) (P. 502-503)	Encyclopedia of Stress 2nd ed. の Sociology of Suicideの項目を翻訳 E. デュルケームの自殺論の概要及び現代の自殺の特徴に関する記述を翻訳 日本ストレス学会監修 加藤英一、その他545名
(辞典) 3. 『ストレス科学辞典』	共著	2011年6月	実務教育出版 (P. 64-65、P. 677-878)	「医療職の人間関係」および「ヒューマンサービスとしての医療」の2項目を執筆 「医療職の人間関係」：医療機関における専門職間の人間関係、そこで生じるストレスに関して記述している。特に医療職の中でも医師、看護師そして他の医療専門職(薬剤師、放射線技師、臨床検査技師等)を取り上げて各々のストレスに関して記述している。 「ヒューマンサービスとしての医療」：対人関係(患者と医療者)としての医療職をヒューマンサービスと位置づけ、そこで生じる医療職のストレス(「燃え尽き症候群」など)に関して記述している。 日本ストレス学会・(財)パブリックヘルスリサーチセンター監修 加藤英一、その他552名
(学術論文) 1. 『「合理性」概念と社会秩序－自由と平等を前提とした社会の成立－』	単著	1996年2月	慶應義塾大学(修士論文) P. 1-175	西欧では、ルネサンスや宗教改革、市民革命を経て近代市民社会が現れることになった。ここにおいて近代における個人という概念も生まれることになったが、それは自由と平等という思想と密接に関わる。またここで問題として現れることになったのが、個人の自由と平等を前提として、如何にして社会秩序を保つことができるのかという点である。この問題を克服する手段として生み出されることになった概念のひとつが、近代における合理性という概念であることを明らかにした。
2. 「『合理性』という概念について」	単著	1996年5月	湘南藤沢学会 (富永健一監修『現代社会の構造と動態第2集』) pp. 189-222	ルネサンス期、宗教改革期、イギリス市民革命期、大陸における市民革命期、産業革命期、帝国主義期、20世紀後半の7つの時代区分を設けて、それぞれの時代における合理性の概念を社会学の視点から明らかにした。その上で、この合理性の概念が当該社会と如何なる関わりをもち、そして社会の秩序に対して如何に貢献してきたのかを正義(=公正)との関連から考察を試みた。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3.「党議拘束外しのパラドックスー臓器移植法の成立をめぐるー」	単著	1999年7月	東北社会学会(社会学年報第28号) pp. 123-142	日本における臓器移植法の成立過程では、各大政党が投票過程でその党議拘束を外したにもかかわらず、その結果が政党色の強いものとなった点を統計解析を通じて明らかにした。その上で、このような結果をもたらすことになった理由を、臓器移植法の成立過程を概観し、社会学者マートンが提示している準拠枠の概念を用いて明らかにした。
4.「脳死・臓器移植問題と社会的合意」	単著	2000年7月	三田社会学会(三田社会学第5号) pp. 96-110	日本における脳死・臓器移植問題の経緯は、技術的側面、制度的側面、文化的側面の3側面の時間的ズレとして現れてきた。初めは技術的側面、即ち医学的問題としての脳死判定が課題であった。しかし1980年代になると生物現象としての医学的な死と社会的な個体の死とが区別され、制度的側面が中心課題となった。またその過程において、社会的合意という概念が1990年ごろを境に法律の概念とは分けられるようになり、制度的側面とは別に社会的合意が文化的側面として問題視されるところになった。
5.「脳死・臓器移植問題の異相性ー日本と米国との比較ー」	単著	2000年12月	(財)医療科学研究所(医療と社会第10巻第3号) pp. 61-73	米国では脳死・臓器移植問題から道徳的・哲学的側面を外し、あくまで「死の定義」は医学と法的な領域に限定した。それに対して、日本では脳死・臓器移植問題の時間的経緯の中で、この問題が医学的問題、法的問題、文化・社会的問題とうい3つの領域にまたがっていることが認知され、そのなかでも文化・社会的問題が中心となっていった。この点が米国と比較して、特に日本における「脳死問題」をより複雑にした。
6.「脳死・臓器移植問題に関する病院関係者へのアンケート調査ー昭和大学病院における質問紙調査結果報告ー」	共著	2000年3月	昭和大学教養部(昭和大学教養部紀要第31巻) pp. 21-41	病院に勤務するスタッフ(医療従事者のみではなく、事務職をも含めた)3,058名への脳死・臓器移植問題に関する質問票による計量的調査。内容としては、①医療関係者の関心度、②医療関係者の意見(a脳死に関する意見、b臓器移植に関する意見)、③医療関係者の態度、④医療関係者の脳死・臓器移植に関する知識度、⑤移植従事者の患者(ドナー、レシピエント)に対する配慮、を明らかにした。 加藤英一、田村京子 共同研究につき、本人担当部分抽出不可能
7.「臓器提供施設における諸問題ー医療従事者の問題意識ー」	単著	2001年7月	東北社会学会(社会学年報第30号) pp. 99-117	脳死からの臓器摘出に直接に携わった医療従事者への面接調査。この質的調査を通じて、医療従事者と患者・家族とのコミュニケーションの相異を明らかにした。脳死からの臓器摘出では、そこに何段階かのステップが存在しており、各ステップごとに医療の担当者が入れ替わる。そこで医療従事者と患者やその家族とのかわり方も各段階で異なる。即ち医療におけるコミュニケーションのあり方が異なるのである。
8.「『脳死問題』における二項対立図式」	単著	2001年5月	慶應義塾大学大学院社会学研究科(慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要第52号) pp. 7-15	日本における「脳死問題」は、既存の死の概念としての「三兆候死」対新たな死の概念としての「脳死」という二項対立図式として構築された。脳死が既存の死の概念と対立するものと捉えられたことによって、「脳死問題」は社会全体における既存の価値体系の変化を要求する重大問題となり、それが「社会的合意論」として展開されることを通じてより複雑化していった。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
9. 「脳死臓器移植の諸問題－マイクロとマクロの視点から－」	単著	2002年2月	武蔵工業大学環境情報学部（武蔵工業大学環境情報学部紀要第3号） pp. 124-135	脳死・臓器移植問題をマイクロとマクロの両視点から捉えた。マイクロの視点において焦点となるのは、ドナーの家族である。「見えない死」である脳死を人の死として承諾するか否かの結論は、最終的には家族に委ねられている。肉親が脳死状態に陥るといった困難な状況におかれながらも、その家族には最終的な決定が迫られる。他方、マクロの視点からは臓器移植における私的領域の「贈与」と公的領域の「分配」とが問題となる。特にここでは分配の公正が問題とされる。
10. 「臓器移植システムと臓器の提供」	単著	2002年6月	関東社会学会（年報社会学論集第15号） pp. 238-249	米国の臓器移植医療システムと日本のそれとを比較し、そこでの3つの相異点を明らかにした。第1の点は両国の組織形態の相異。米国がネットワーク型組織であるのに対し、日本のそれはビューロクラシー型である。第2の点は日本の臓器移植システムの構築は、行政が指導的立場を担ったのに対して、米国では民間の非営利組織（NPO）が中心となった。第3の点は日本の臓器移植システムには、米国のような臓器獲得機関が存在しないことである。
11. 「日米における臓器移植システムの相異」	単著	2002年7月	東北社会学会（社会学年報第31号） pp. 213-227	日本には米国のような臓器獲得機関が存在しない。日本では、臓器移植の機会の公平性と効果的な移植の実施をもって移植医療の秩序を維持することが臓器移植システムに求められた。ここでは「公益」の名の下、行政による移植医療への管理がなされ、そのことから臓器の提供が「公」による臓器の剥奪と捉えられることになった。この点が、臓器獲得システムを日本の臓器移植システムの中に組み入れることを困難にしまった。
12. 『臓器提供と臓器移植システム－移植医療の社会学的研究－』	単著	2004年2月	慶應義塾大学（博士論文） P. 1-182	米国の臓器移植システムも日本のそれと共に国のレベルにおいて構築された。但し日本においては「公益に資するため」、そして米国においては“for the Public”がこのシステムの前提である。ここで“Public”とは、people in general、即ち特別な人ではない一般の人びとを意味する。それとは対照的に、日本における「公」という言葉は「官」（お上）と密接な関係にある。両国間における臓器移植システムの相異は、各々の公共性概念の相異から生じている。
13. 「社会問題としての日本の医療安全」	単著	2006年7月	東北社会学会（社会学年報第35号） pp. 211-230	医療事故件数の正確な数すら不明であるにも拘わらず今日、何故に医療事故が医療安全という脈絡において社会問題として認識されるようになったのか、という問題意識に対して、本稿ではそれを相互に関連する3つの要因、①医療内容を巡る要因、②マス・メディアを巡る要因、そして③制度を巡る要因からその説明を行った。特に制度の要因においては、医療従事者個人のみならず医療システムに対する信頼が不可欠であることを明らかにした。
14. 「日本の近代化と「衛生」の構築－後藤新平『国家衛生原理』を通じて－	単著	2007年3月	北里大学一般教育部（北里大学一般教育紀要第12号） pp. 44-59	現代の国家と医療とは密接な関わりを持っている。日本では明治期における近代化の過程において、「衛生」という概念がそれまで私的な領域とされてきた養生を国家の領域へと結びつける役割を果たした。本稿では、明治期における日本の近代国家化とこの「衛生」という概念との関係を、行政という立場から確立した1人でもある後藤新平という人物の思想を通じて明らかにした。

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
15.「有害事象における不信増幅のプロセス－医療訴訟の事例分析から－」	単著	2007年7月	東北社会学会（社会学年報第36号）pp. 1-21	裁判記録を用いた質的調査。医療における有害事象の被害は、主に「事実の解明」、「医療従事者による謝罪」、「事故を今後の教訓にして欲しい」という3つの要求を訴えて裁判を起こす。そこでこの3つの要求が生じる過程を、某地方裁判所において、2001年9月から2005年6月までに判決が出された医療にまつわる主な民事訴訟74件の内、有害事象に関する25件を抽出し、その中でも裁判資料（陳述書、口頭弁論の記録等）の利用が可能な20件を用いて分析した。
16.「授業の満足に関する要因の分析－北里大学一般教育部の授業におけるアンケート調査を通じて－」	単著	2008年3月	北里大学一般教育部（北里大学一般教育紀要第13号）pp. 59-70	授業に対する学生の満足度に影響を与える要因を明らかにするため、北里大学の1年生を対象とした社会調査を実施した。学生の満足度に影響を与える要因として「授業の理解度」、「授業方法・内容に対する評価」、「授業への興味・関心度」、「授業に対する態度・姿勢」を取り上げ、各々の関係を明らかにした。「授業の満足度」と最も相関が高かったのは「授業への興味・関心度」であり、相関係数は0.69を示した。次に高い相関を示したのは、「授業に対する態度・姿勢」であり相関係数は0.58であった。そして3番目が相関係数0.56の「授業の理解度」、4番目が「授業方法・内容に対する評価（資料の記述方法：相関係数0.41）、（映像の内容：相関係数0.24）」であった。また学部間による満足度の相異に関しては、統計的に有意差は見られなかった。
17.「ゲーム理論からみた医師－看護師関係－ホーマンズ理論で解くゲーム理論と地位の変動－」	単著	2008年12月	明治学院大学社会学部論叢（橋本茂先生退任記念129号）pp. 67-98	社会学者ホーマンズの行為の一般理論および彼のシステム論を用いて、医師と看護師との相互行為をシュタインが提示した医師－看護師ゲームとして考察を試みた。特に1970年代における医師と看護師との関係で、医師の地位が看護師よりも上位にあるというゲームのルールが、医療をめぐる環境の変化から1990年代以降、必ずしも遵守されなくなったことを社会的交換の理論から説明した。
18.「授業の満足に関する要因の分析（2）－北里大学一般教育部の授業におけるアンケート調査を通じて－」	単著	2009年3月	北里大学一般教育部（北里大学一般教育紀要第14号）pp. 95-107	本稿は2007年に行った学生の授業に対する満足度の調査を踏まえ、1年後の2008年に同一の調査を行うことで満足度に与える要因をより明確にした。2回の調査結果を比較すると、そこでの回答の傾向に大きな差異を見つける事は出来なかった。特に授業の満足度に与える影響としては、「授業への興味・関心」、「授業に対する態度・姿勢」、そして「授業の理解」の3つの要因が最も強いことが両調査でも共通した結果であった。
19.「改正臓器移植法をめぐる投票行動」	単著	2010年3月	北里大学一般教育部（北里大学一般教育紀要15号）pp. 111-131	2009年に「臓器移植に関する法律」の改正案が国会において採決されたが、日本共産党を除いた各政党は、改正案の特性から投票に際して党議拘束を外した。投票の結果、原案通りに改正案は成立した。これによって日本では、法的に脳死が人の死として認められることになった。衆・参両議院での投票行動は、党議拘束を外したにも拘らず、政党による影響を否定できない結果となった。それは1997年の「臓器の移植に関する法律」が可決された際と同じである。これはR. K. マートンの準拠枠組みの理論によって、ある程度は説明が可能である。しかし今回の法改正における投票行動では、それ以外の要因も存在した。衆・参議院のねじれ状態や小泉チルドレンの影響がそれである。

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
20. 「授業の満足度と成績との関係－北里大学一般教育部の授業（社会学）におけるアンケート調査を通じて－」	単著	2010年3月	北里大学一般教育部（北里大学一般教育紀要15号）pp. 159-177	本稿では授業の満足度と成績との関係を、学生に対するアンケート調査と期末試験の結果を基に明らかにすることを試みた。授業の満足度と成績との関係では、統計的な相関関係を見出すことができた（相関係数0.23）。また成績に関しては、学生の性別および学部別に統計的有意差を見出すことができたものの、満足度に関しては統計的な有意差を見出すことはできなかった。
21. 「医療安全管理者としての医師と看護師－自由記載からみた問題意識の相異－」	共著	2010年7月	東北社会学会（社会学年報第39号）pp. 89-97	本稿は医療安全管理者が、日常の業務の中で抱えている問題点の分析という観点から、異なった医療資格者間の中でも、医師と看護師における安全業務に対する問題意識の相異を社会調査を通して明らかにした。結果として、同じ医療安全管理者でありながらも、医師と看護師とは異なった問題意識を抱えていることが明らかとなった。 加藤英一、田村京子 共同研究につき、本人担当部分抽出不可能
22. "The Analysis of Job Satisfaction of Japanese Medical Safety Managers"（英文）	共著	2011年3月	Kitasato University College of Liberal Arts and Sciences（Annual Report of Studies in Liberal Arts and Sciences Vo. 16）pp. 137-150	医療安全のシステムは、国によって異なる。日本の場合、専任の医療安全管理者の多くは、同一の医療組織内において上司からの指示で任命されている。本稿では、この医療安全管理者の業務に対する苦悩を社会調査を通じて明らかにした。調査としては、日本医療機能評価機構から医療安全の認定を受けている2,317の医療機関に対して調査票を郵送し、そのうちの930機関から回答を得た。医療安全管理者となった理由としては、「上司からの指示」が605(65.5%)であった。それに続いて、「上司からの推薦」が207(22.4%)であり、両者を合わせると全体の87.9%であった。また医療安全管理者の約40%は、自らの仕事に不満を抱えていることも明らかとなった。そこで回答者を、彼らの満足度に基づいて3つのグループに分け、グループ間の相異を因子分析を用いて解析した。 加藤英一、田村京子 共同研究につき、本人担当部分抽出不可能
23. 「ファジィ集合から捉えた集合意識－授業評価アンケートの分析を通して－」	単著	2011年3月	北里大学一般教育部（北里大学一般教育紀要16号）pp. 107-126	社会システム理論では、社会を一種の有機体として捉えるが、この有機体における意思をデュルケームは集合意識と称した。集合意識には、その特徴として、外在性、拘束性、一般性をあげることができ、それは諸個人の行為に影響を与える。集合意識を抽出する方法としては、主に統計学が利用されるものの、そこには問題もある。特に意識としての「あいまいさ」が考慮されていないことも問題の1つである。そこで本稿では、ファジィ理論を用いて集合意識を抽出する方法の構築を試みた。具体的には、授業に関する評価アンケートのデータからファジィグラフを作成し、ここから授業に関する集合意識の構造を読み取った。
24. 「医療安全管理業務における支配の非貫徹性－医療安全管理者への質問票調査を通じて－」	単著	2012年3月	北里大学保健衛生学院紀要第17巻（北里大学保健衛生学院）pp. 1-10	本稿は支配という脈絡から、医療安全管理者の業務遂行における支配の非貫徹性についての説明を行った。医療安全管理業務の遂行には、他の病院職員からの協力が必要不可欠である。しかし他の職員による自発的な協力を得ることは、安全管理業務の特性から困難である。そこで業務の遂行には、病院組織内における統制としての支配が必要となる。しかし現実には、医療安全管理業務の遂行が困難な状況にある。この状況は支配の非貫徹を意味している。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
25. 「医療安全管理業務を担う看護師の動機づけ要因の分析」		2013年1月	日本保健医療社会学会 (保健医療社会学論集第23巻2号) pp. 59-68	本稿は、看護師の医療安全管理者の業務に対する動機付け要因を質問票を用いて明らかにした。調査対象は日本医療機能評価機構から医療安全の認定を受けている全国の2,317の病院とした。その内の930病院 (40.1%) から回答を得ることができた。回答者の中で看護職の占める割合は、約7割であった。統計分析のデータとして、この看護師の安全管理者からの回答を用いた。ハーズバーグ (F.Herzberg) によれば職務満足に影響を与える要因には、動機付け要因と衛生要因とがあるが、本稿は前者を研究対象とした。動機付け要因の内容として、患者・家族からの安全管理者への評価 (患者評価)、組織の医療安全に対する姿勢 (組織姿勢)、他職員からの安全管理者への評価 (他職員評価)、職務成果の組織内での活用度 (データ活用度) を設定した。その上で、職務満足に関する回答で「どちらでもない」 (176名: 29.3%) を除いたデータを満足群 (178名: 29.6%) と不満群 (247名: 41.1%) とに分けてロジスティック回帰分析を行った。結論として動機付け要因の内、他職員からの安全管理者への評価、組織の医療安全に対する姿勢、職務成果の組織内での活用度の順で職務満足に影響を与えていることが明らかとなった。
26. 地域医療改革に伴う病院機能分担に対する住民の意識—新潟県魚沼圏域の事例—	共著	2016年3月	北里大学保健衛生学院紀要第21巻 (北里大学保健衛生学院) 分担範囲の明示不可 pp. 37-47	地域医療の改革が、全国的に急速に進められている。その中でも採算性に問題を抱えている、地方の公立病院の再編成が急務とされている。本稿はその一例として新潟県魚沼圏域における地域医療改革を取り上げている。この地域では、2015年魚沼基幹病院の開院と共に地域の公立病院間の機能分担と連携、即ち基幹病院を中心としたネットワーク化を主眼とした地域医療の改革が進められている。但し地域医療の改革は、地域の住民の利益に資するものでなければならない。そこで本稿では、住民に対するアンケート調査を通じて、地域の人々が改革による病院間のネットワーク化をどのように捉えているのかを調べた。その結果、病院間のネットワーク化に対しては、反対が23.1%、どちらとも言えないが30.8%、そして賛成が46.0%で賛成が反対を大きく上回っていた。しかし一方で、高齢者層の受療行動をみると居住地と既存の各病院との繋がりが強く、改革によって通院する病院が変更となることもありその負担も懸念されている。 加藤英一、渡辺しき子、佐藤幸子 共同研究につき、本人担当部分抽出不可能
27. 後期高齢者医療制度の負担に対する公平性	単著	2017年1月	保健医療社会学論集第27巻2号 (日本保健医療社会学会) pp. 1-11	後期高齢者医療制度が2008年から始まった。このような一定年齢以上の高齢者のみを対象とした独立の医療保険制度は、世界でも他に類を見ない。またその特徴は保険財源にもみられる。被保険者の保険料が約1割、他の保険者からの支援金が約4割、そして公費が約5割である。ここで問題となるのが各保険者からの支援金の配分、即ち費用負担の配分の公平性である。具体的には健康保険組合、全国健康保険協会、国民健康保険の3つの保険者間の費用負担の公平性が問われる。本稿ではこの問題に対して、支援金の負担額そのものの配分を問うのではなく、保険の加入による効用としての利得から配分の公平性を問題としている。方法としては保険加入による利得計算を下にゲーム理論を参考とし、その特性関数から公平性を問っている。その結果、後期高齢者医療制度は不公平なシステムとまではいえない。

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
28. 地域医療改革に対する住民の評価－地域医療改革2年経過後の新潟県魚沼圏域の事例－	共著	2018年9月	北里大学保健衛生学院紀要第23巻(北里大学保健衛生学院)分担範囲の明示不可pp. 1-12	新潟県は2015年から魚沼圏域における地域医療改革に取り組んでいる。改革は2年を経過したが、その成果は現れているのであろうか。本調査研究は調査票を用いて、地域住民が今回の改革を如何に評価しているのかを探ってみた。被調査者は魚沼市と南魚沼市在住者(20歳以上、特別養護老人ホーム入所者は除く)1,500人(内魚沼市600人と南魚沼市900人)とし郵送による留め置き法を用いた。返送された調査票は714票であり、回収率は47.7%であった。結果全体としては、住民の半数以上が魚沼圏域の医療改革に関して肯定的な評価をしている一方で、魚沼市と南魚沼市とではその評価に差異がみられた。魚沼市は南魚沼市に対して有意に評価が低いことが明らかとなった。 加藤英一、渡辺しき子、佐藤幸子 共同研究につき、本人担当部分抽出不可能
29. 地域医療の改革に対する南魚沼市民の集合の意識構造－ファジィ集合による分析－	単著	2018年9月	北里大学保健衛生学院紀要第23巻(北里大学保健衛生学院)pp. 13-24	公立病院を中心として地域医療の改革が全国で進められている。本稿ではその1例として、新潟県魚沼圏域における地域医療改革を取り上げ、そこでの住民(南魚沼市)の改革に対する意識を調査票から明らかにする試みを行った。その際、意識の「あいまいさ」を考慮することから、ファジィ理論を応用した分析を行った。これによって住民意識としての改革に対する集合の意識構造を抽出した。それによると住民の集合の意識構造は「健康・医療に対する意識の高さ」、「地域医療に対する意識の高さ」、そして「健康状態」とう3つのファクターによって構成されていることが明らかとなった。
30. スポーツマンシップの意義	単著	2021年3月	横浜商大論集54号第1・2号合併(横浜商科大学) pp. 1-12	今日、スポーツは広く社会の隅々にまで浸透しており、誰もがスポーツを享受する権利を有している。しかしそれに伴って、スポーツをめぐる様々な問題も生じている。そしてこれらスポーツをめぐる問題が生じるたびに、人びとから語られるのがスポーツマンシップという言葉である。 スポーツマンシップという概念は社会と密接に関連しており、社会の変動と共に変遷してきた。しかしその一方で、スポーツを通じて聖と俗とを分ける差異化のための、コートとして機能している点においては歴史を通じて共通している。
31. スポーツ参与とその要因－『スポーツの実施状況等に関する世論調査』からみえたもの－	単著	2021年3月	横浜商大論集54号第1・2号合併(横浜商科大学) pp. 13-24	本稿では、スポーツ庁健康スポーツ課が2019年に実施した『スポーツの実施状況等に関する世論調査』を用いた統計解析を利用して、スポーツ参与に与える要因を明らかにすることを試みた。 スポーツ参与に影響を与える要因として身体的要因と社会経済的要因、そして心的要因の3つのカテゴリーを挙げた。重回帰分析の結果、心的要因が他の2要因よりスポーツ参与に対する影響が強いことが分かった。

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
32. 現代女性のスポーツ参加について	単著	2021年3月	横浜商大論集54号第1・2号合併(横浜商科大学) pp. 25-34	<p>本稿では、ジェンダーをめぐるスポーツ参加の格差に関して検討を試みた。男女の性別によるスポーツ参加に関しては、統計的な有意差が認められた。また女性の年代別のスポーツ参加でも、統計的な有意差がみられた。女性の年代別では、20代と30代において少しはスポーツを行っているが、40代と50代になるとスポーツを行わなくなり、60代と70代になるとスポーツを頻繁に行うようになる傾向がみられる。</p> <p>40代および50代の女性の中でスポーツを日常的に行っていない人々は、スポーツそのものに対する関心が低いのではないと思われる。但し、このような無関心が何故にこの年代の女性に生じているのかに関しては、現段階においてその原因を明言するには至っていない。</p>
33. 古代ギリシャの正義論	単著	2022年3月	横浜商大論集56号第2号(横浜商科大学) pp. 1-18	<p>本稿では古代ギリシャにおける、正義を巡る議論の流れを把握すると共に、正義に関して共有した側面を見出すことを試みた。ここでは主にギリシャ神話からソクラテス以前の哲学、プラトン、そしてアリストテレスに関する正義の諸理論を中心に取り上げた。</p> <p>ギリシャ神話では正義は、神を含めた人々との間における一定の法則や秩序を示すものであった。但し、そこでの正義は主に報復を意味するものであった。</p> <p>ソクラテス以前の4元素論では、輪廻や循環、そして相反するもの同士の諧調という発想が生まれ、そこから永久性、無限定性、不滅性、独立性、完全性という特徴を有した思想が生じることになった。これらは後に、精神や魂という概念を通じて正義論にも影響を与えた。</p> <p>ギリシャ哲学においては、プラトンおよびアリストテレスが正義について論じている。両者の相異点は、正義の捉え方にある。それはプラトンがイデア論を基にしているのに対して、アリストテレスのそれは目的論を基にしていることによるものである。一方、両者の共有点は都市国家(ポリス)を前提として、正義が一種の社会秩序として捉えられ、それが魂、徳、善、そして最高善(幸福)という概念構成から論理的に導かれていることである。またこの秩序としての正義は、魂や徳の生得性という点からも永久性、無限定性、不滅性、独立性、完全性という特性を孕んでいる。</p> <p>このように古代ギリシャにおける正義とは永久性、無限定性、不滅性、独立性、完全性といった特徴を有した社会秩序である。</p>

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
34. ヘレニズム時代の正義論	単著	2023年3月 (掲載決定)	横浜商大論集56号第2号 (横浜商科大学)	ヘレニズム時代の哲学の特徴と、そこでの正義論について考察を試みた。本稿では、ヘレニズム時代の哲学を代表するものとしてエピクロス派とストア派、そして懐疑学派を取り上げた。 エピクロス派は帰納主義的方法論の立場をとり、それが故にその学問的基盤を原子論に求めた。それに対してストア派は、理性の存在を前提とした演繹主義的方法論の立場をとった。またこの両学派によれば、人は自然を正確に知覚することができるとしているのに対して、懐疑学派はその可能性を否定した。このように3つの学派の前提は異なるものの、ヘレニズム時代の哲学として共通する点も存在する。人の魂や倫理までを含めた自然という概念である。3つの学派は、共に自然を物理的存在として捉えている。エピクロス派によれば全て自然は原子によって構成されているとされ、ストア派によれば自然は全て原因と結果とによる因果関係として捉えられている。懐疑学派も人が自然を正確に知覚することは否定するものの、自然の存在は認めている。 そしてこの自然との調和が、人における幸福であるとされる。ここでの幸福は、古代ギリシャの哲学で語られたようなポリスと結び付けられることはなく、あくまでひとり一人におけるものである。これはヘレニズム文化の特徴の一つである、コスモポリタニズムからの影響であるといえる。 このようなヘレニズム時代の哲学の特徴は、そこでの正義論にも影響を及ぼしている。ヘレニズム時代の哲学において、正義を人と人との関係として捉えている点は、古代ギリシャ哲学のそれと同様である。但し、目的としての幸福は自然との調和であり、正義はそのための1手段であるとされるのがその特徴である。またここでの正義は、永久性や普遍性という特性を帯びている。これもヘレニズム時代の哲学の中核的概念である、自然との調和を幸福とみなす考え方による影響である。人々の関係としての正義も、自然の中に「存在」することから、それは永久性や普遍性といった特性を有した予定調和的なものである。
(その他) (口頭発表)				
1. J. S. コールマンの社会理論について	単独	1994年12月	明治学院社会・社会福祉学会大会	明治学院社会・社会福祉学会大会発表論旨集
2. プロトコル分析と発話カテゴリー	単独	1998年7月	東北社会学会大会 (第45回)	東北社会学会大会発表論旨集
3. 合意は如何にして形成されるのか? -臓器移植法の成立を巡って-	単独	1998年11月	日本社会学会大会 (第71回)	日本社会学会大会発表論旨集
4. 臓器移植法案作成までのプロセス	単独	1999年6月	関東社会学会大会 (第47回)	関東社会学会大会発表論旨集
5. 脳死問題の構築-日医と日弁連とのクレイム活動を通じて-	単独	1999年10月	日本社会学会大会 (第72回)	日本社会学会大会発表論旨集
6. 脳死・臓器移植問題の異相性	単独	2000年7月	東北社会学会大会 (第47回)	東北社会学会大会発表論旨集
7. 臓器提供施設における諸問題-医療従事者からみた脳死・臓器移植問題	単独	2001年11月	日本社会学会大会 (第74回)	日本社会学会大会発表論旨集
8. パーソナルの医師-患者関係と患者中心志向の医療	単独	2005年10月	日本社会学会大会 (第78回)	日本社会学会大会発表論旨集

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
9. 新潟県魚沼地域の医療 再編に対する住民の意識	単独	2015年9月	日本社会学会大会 (第 88回)	日本社会学会大会発表論旨集
10. 魚沼地域医療の改革に 対する住民の集合意識ー ファジィ理論に基づく解	単独	2016年11月	魚沼シンポジア	魚沼シンポジア大会発表論旨集